

■第六章 欲望と欲望を持つ者 (desire and the desirous) の考察

前章の最後の詩で救済の可能性について触れた部分に出てきた「平安」 pacification は、欲望と執着を絶つことで実現できるわけだが、この章ではその欲望について論じられている。事物の無実体性の論証に引き続いて、人間の側の心理、欲望なども無実体であると説かれるのである。1. から 3. までは実体論者の見解を想定して応じている部分であり、また、最初の詩の出だしは前章のそれと同じ形である。

1. もし欲望 desire に先立って

もしくは欲望なしに、欲望を持つ者 desirous one が存在するなら

欲望は彼に依存していることになる

欲望は欲望を持つ者がいる場合に存在することになる

1. 意識

(実体論者たちは、「欲望を持つ者」が「欲望」から独立して本質を持って存在していると主張する。ということは、)「欲望」に先立って、もしくは「欲望」なしに「欲望を持つ者」が存在する(のである。しかしもしそう)なら、「欲望」自体は従属的なものであって、「欲望を持つ者」に依存して存在していることになる。「欲望」は「欲望を持つ者」が存在するときだけ存在することになるはずである。(そのような依存的な存在は、実体論者にとっては「まったく存在しないもの」である。)

欲望の主体が実体として存在し、欲望自体はその主体に依存しているがゆえに実体としては存在していないのなら、両者の存在様態は別のものだと言っていることになる。つまり実体としての存在様態と、依存的なものとしての存在様態が共存していることになって矛盾する。また、欲望自体は実体でないという場合、実体論者にとって実体として存在していないものは「まったく存在していないもの」であるので、欲望自体は非存在だということになるはずである。しかし欲望というものが「まったく存在しない」なら、「欲望を持つ者」、という具合に「欲望」という語で示される主体の概念は、いったい何の必要があってそのように呼ばれているのか、という疑問が出てくるはずである。(もちろん、「欲望」と「欲望を持つ者」とが両方とも実体であり、お互いに独立して存在している場

合はなおのこと、両者はまったく関係を持つことがないのであるから、「欲望」と「欲望を持つ者」というネーミングは初めから矛盾しているのであり、ここでの「二つのものの関係についての」議論は起こりもしなかったのである。)

2. 欲望を持つ者が存在しないなら

いったいどこに欲望が生じるというのか

欲望もしくは欲望を持つ者が存在しようがしなからうが

この分析はどちらでも同じことになる

2. 意識

反対に（「欲望」が「欲望を持つ者」から独立して本質を持って存在しているならば、「欲望を持つ者」が存在しない場合にも「欲望」が単独で存在できるのであり、「欲望を持つ者」の方が依存的な存在になる。しかも依存的な存在は実体論者にとっては「存在しないもの」なので、「欲望を持つ者」はまったく存在しないものだということになるが）、「欲望を持つ者」が存在しないならば、「欲望」は誰の中に生じることができるのだろうか。「欲望」が実体として存在する場合も、まったく存在しない場合も、また、「欲望を持つ者」が実体として存在する場合も、まったく存在しない場合も、それを分析した結論はまったく同じものとなる。（つまり、実体という考えは矛盾しているのである。）

この部分は省略されていて難解である。したがって括弧の中に1.と同じ論点を補っておいた。「欲望」が本質的に存在するのだと主張し得るなら、「欲望を持つ者」の中にその根拠を求める必要はまったくないのであり、持ち主のいない欲望が独りで存在することになるのである。

以上の二つの詩で取り上げられている問題は、関係的説明というものは、実体存在を一つでも認めた場合には成り立たないということである。本質的な存在（実体）は関係的な存在ではないのであり、関係性を排除するのである。

3. 欲望と欲望を持つ者が
同時に生じることはできない
その場合（もし同時に生ずるなら）、欲望と欲望を持つ者は
お互いを条件とし合って mutually contingent はいないことになる

3. 意識

（「欲望」と「欲望を持つ者」とが、同時に本質的存在として生じるのだと主張する者もいるかもしれないが、）「欲望」と「欲望を持つ者」とが同時に生じることはできない。もし同時に生じるというのなら両者は依存し合っていないわけであり、「欲望」——「欲望を持つ者」という具合に、お互いを条件とする名で呼ばれたりはしないはずである。

4. 同一性 identity のなかに同時性 simultaneity はあり得ない
一つの事物がそれ自身と同時的である、などということはないのである
しかしもし（欲望と欲望を持つ者とに）差異 difference が存在するならば
さらにそこにどのように同時性があるというのか

4. 意識

（「欲望」と「欲望を持つ者」とが同時に生じるのであれば、両者は同一のものであるか、あるいは別々のものであるかのどちらかである。しかし、）同一のものが同時に生じるということとはあり得ない。「一つの事物がそれ自身と同時に生じる」などという表現は矛盾している。しかし反対に、「欲望」と「欲望を持つ者」とが完全に別々のものとして、独立した本質を持つ実体として存在しているならば、両者が関係し合うということはないのであり、同時に同じ場所に生じるなどということとは起こり得ない。

5. もし同一性のなかに同時性があるのなら
それは関係性 association を持たずに生じるだろう
もし差異のなかに同時性があるのなら
それは関係性を持たずに生じるだろう

5. 意識

もし同時に存在する事物は同一のものであるという論法が正しければ、同一のものであるがゆえに、二つの別々の事物が関係し合うなどという事態は起こり得ない（わけであり、一つの事物が関係性を持たずに生じることだろう）。反対に、もし二つの事物が独立した本質を持った実体であり、完全に別個のものであるがゆえに「同時に生じる」という事態が起きている¹ というのなら、この場合も（、独立した実体ならばお互いに関係し合うことはないのだから、）関係性を持たずに生じることだろう。

6. もし差異の中に同時性があるのなら

どうすれば欲望と欲望を持つ者とが

別物として、確証されていると言えるのだろうか

もしそれが言えるとするならば、それらは同時的なものかもしれないが

6. 意識

もし事物が実体として個々別々に存在しているからこそ、両者が「同時」に生じるという事態も起こり得ると考えるなら、「欲望」と「欲望を持つ者」とが別の場所に別のものとして存在していることになるわけであるが、どうしてそんなことが可能だろうか。もし可能なら、確かに事物は実体であるがゆえに同時に生じる、とも言えるのだろうか。

1. デイヴィッド・ヒューム（1711～1776）は経験論（知覚によって経験できたものだけを知識と考える立場だが、経験に先立つ事物の存在を前提にするという点で実体論的側面を持つ）の見解をとった上で、まったく別々の事物が常に同時に起こるとき、そこに因果関係が生じているように「見える」に過ぎないのだという懐疑論を展開した。これに対してインマヌエル・カント（1724～1804）は、ナーゲルジュナ流に言えば非実体論的な立場から因果関係という関係性を主張することで反論している。これについては後でもっと具体的に触れるが、ここでの論議と似た部分があるので、東西の哲学について比較できる一つの論点であることを指摘しておきたい。ガーフィールドもこの点についてヒュームの名を出している。Garfield p.156

7. もし欲望と欲望を持つ者が
別のものとして確認されているなら
あなたがたはその上でどうやって両者が
同時に存在するものだと考えられるのだろうか

7. 意識

もし「欲望」と「欲望を持つ者」とが実体としてまったく別のものだということが確かだというならば、そう言うあなたがたは、まったく別の両者がいつも同時に存在できている理由をどう考えているのか。どうして常に同時に存在するのか。

8. 差異が確認されていないので
それらは同時に存在するのだとあなたがたが主張するのであれば
両者が同時に存在するのだと確認されているので
それらは別のものであるともあなたがたは主張するのだろうか

8. 意識

(あるいは、)「欲望」と「欲望を持つ者」とが完全に別の実体であることを我々は証明することはできないのであるから、それがゆえに両者が同時に存在することができるのだと(、つまり両者は同一の実体だ)、とあなたがたが主張するのであれば、またその上で、両者が「同時に」存在することは確かなので、それがゆえに、それらが別々の実体だとも主張するつもりだろうか。

9. 何も異なるということが確認されていることによって
同時性を主張している者があるなら
どんな異なったものが
同時的であると言うつもりだろうか

9. 意識

(さらに言えば、)「欲望」と「欲望を持つ者」とが同一のものであることが確認されているがゆえに、両者が同時に生じるのだと主張している者がいるなら、同時であるという

ことを成立させている「何と何が」という区別自体をその者はどう説明するのか。（同一でありながら、）どんな風に異なったものなら同時に生じるということがあるのだろうか。

10. このように、欲望と欲望を持つ者とは
同時的にも、同時でないものとしても確認されない
したがって欲望と同様に
同時的であれ、同時的でないものとしてであれ、確認されるものは何もない

10. 意識

以上のことからわかるように、「欲望」と「欲望を持つ者」――主体とその性質――とは、同時に生じるものとしても、同時に生じるものではないものとしても、証明することはできないのである。そしてこのことは何も「欲望」と「欲望でないもの」とに限らず、あらゆる事物について言い得ることである。（本質を持った実体として物事をとらえようとした場合は、）同時に生じるものだとか、同時に生じないものだとかいうことは、どんなものについても一切証明できないのである。（実体として）確認されるものは何もない。

ナーガールジュナはここで、「欲望を持つ者」や「欲望」というものが存在しないと言っているわけではない。言葉の上で、相互に依存し合った概念としては、確かに存在しているのである。目の前に見えるものとしては、我々はそのように認識しているので、それは確かに存在している。しかし実体として、個々に独立した、本質を持ったものとしては存在していないということである。否定されているのはあくまでも「実体性」である。